連載

布を創る ③〇

純銀の布“ルナクロス”の誕生

テキスタイル・デザイナー 新井淳一さん

松尾 武幸

スリット・ヤーン40年の集大成

ポリエステルフィルム6ミクロンに純銀を蒸着させた糸を使った“純銀の布”が誕生した。その布の発明者はテキスタイル・デザイナーの新井淳一さん。新井さんはこの布を“ルナクロス(LUNAR CLOTH)”と名付けた。“ルナ”は月、クロスは布、つまり月の輝きを持った布。これまでポリエステルのフィルムに金属を真空蒸着したものをマイクロスリットして糸状にした、いわゆる“スリットヤーン”の使用は、布の堅牢性からいって12ミクロンが限界とされてきた。新井さんはこのフィルムを6ミクロンとより薄いものにして、それに純銀を真空蒸着させ、これで二枚の銀貨を張り合わせたような二層構造のスリットヤーンを作る。つまり、純銀を空気に触れさせない状態で閉じこめて糸の堅牢性を得ることに着目した。

布は純銀の輝き、そしてとてつもなく軽い。12ミクロン二層に比較して格段の柔らかさがある。抗菌性、電磁波シールドそしてストレッチ性という特長も実現した。従来の金属繊維として、シルバー色の素材としては、アルミ蒸着を使ったものがあったが、その光沢の気品は純銀に及ぶべくもない。テキスタイルデザイナーとしての新井淳一さんのスリットヤーン研究40年の集大成がそこにある。

この“ルナクロス”については、早くもパリの名だたるオートクチュール・デザイナーから「独占的に使いたい」とのオファーも来ている。また、別のパリの有名ブ

ランド・メーカーも、この機会に新井淳一さんのテキスタイル・ビジネスと強い絆を作りたいという熱心な働きかけもある。イタリアの金属繊維を使った布作りで有名なメーカーからは「これから組んで一緒に仕事をしよう」という強い呼びかけも来ている。どうも、ヨーロッパには、テキスタイルデザイナー新井淳一の仕事を絶えずウオッチしているプロフェッショナルな人たちがいるようで、“ルナクロス”の情報はこうした人々のキャッチするところとなったようだ。

純銀の布“ルナ・クロス”を説明する新井淳一さん

Textile Creation

著者紹介 TAKEYUKI MATSUO

Fashion Business Institute

ファッション・ビジネス総合研究所 代表取締役

著者は、アパレルを中心としたファッション・ビジネスの研究をご専門とされ、著書に「アパレル産業ハンドブック」(東洋経済新報社, 1996, 共著), 「よく分かるアパレル業界・日本実業出版社, 1992, 共著」他がある。

本稿では、「産業の空洞化」に抗して、日本のクリエイターたちの“布を創る”努力と業績を紹介していただいた。

「日本には、世界水準を超えたテキスタイル・デザイナーの新井淳一がいる」という評判は、欧米では常識となっており、最近パリで開催されている「1960年から2000年にかけてのモードの変貌」をテーマにした「mutation de mode展」でも、世界のテキスタイル・デザイナーとして、モードのイブ・サンローラン、シャネル、パコランバンヌ達と肩を並べていくつかの作品が展示されている。野球の野茂、サッカーの中田よりもはるかに早くから、世界の檜舞台で活躍しているテキスタイル・デザイナーがいるのである。

新井淳一さんはもともと、桐生の丸帯の機屋の生まれ。1950年に桐生高校を卒業後、稼業の織物業に従事した。丸帯は金、銀のラメ糸を多量に使用するので、子供の時から、金属糸には馴染みがあった。桐生高校の頃に家にあったラメの残糸を使って、ドレス生地を織り、当時の進駐軍の婦人達に売りつけて、そのカネでその頃1500円もした岩波の哲学小辞典を買った思い出もあるという。

新井さんは1961年の第1回化学繊維グランドフェアで、いきなり通産大臣賞を受賞。1966年には、金銀糸として登場したプラスチックフィルムのマイクロスリットヤーンによる新規織物の製織加工を中心に工業所有権の取得は36件に達した。

しかし、新井さんの仕事は金属繊維だけではない。国内外のデザイナーコレクション用に、天然素材を中心とした素材の提案・製作を開始。コンピュータワークによる特殊紋織物の構造開発にも着手する。こうした功績で、1983年には毎日ファッション大賞特別賞を受賞している。この同じ年に米国のRISD(Rhode Island School of Design)美術館でパネリストとして参加、翌年、東京・六本木のアクシスビルに「布」の店を創立開業、1987年には英国

王室芸術協会から、Hon R. D. I.の称号を受け、1992年には国際繊維学会(THE TEXTILE INSTITUTE)からアジア人初のデザイナー勲章を受章している。1998年にはジョーヴィアン・クリスティー社の社長に就任して、「Jun-ichi Arai」ブランド事業部を新設オープンし、99年秋冬コレクションから市場に布や装身具の提案を開始した。奈良の世界遺産・国宝の元興寺には「多重組織のジャガード織物」をパーマネント・コレクションとして収蔵。1999年にJun-ichi Araiブランド桐生店を開店、2000年には同東京店を開店するなどその活動は多彩である。

生まれたばかりの小さなブランドにとっては、新しいプレステージの高い商品群をプロダクトアウトしていくのに、多大な資金というものがようになってくる。ベンチャーファンドを抱き込んだ型で、また、一般市場より多くの資本を募り、その資本が新しいブランドを創っていく市場にこそ、これからのファッションが生まれていくのかも知れない。

現在、新井さんは、資本、経営、生産、販売そして開発を分離させ、それぞれのスペシャリストの融合にて、また新しきものに挑戦し始めた。

これまでの新井淳一さんの仕事ぶりを貫くものは、彼自身の言葉を借りていえば“手とテクノロジーの融合”である。

そこには、職人技を技術革新と結びつけようという考えがあるだけでなく、その担い手である職人そのもの、ものを創り出している人々を大事にしようという思想がある。

ジョーヴィアン・クリスティー

群馬県桐生市本町6-400

TEL.0277-30-3322, FAX.0277-30-3355

「布を創る」連載の終わりに

編集委員 鬘谷 要

かれこれ3年前のことになりますが、繊維学会の仕事の中で、ファッションビジネス総合研究所の代表・松尾武幸先生にお会いする機会があり、日本国内には繊維の技術、特にテキスタイルに関して、世界に誇れる中小の企業が数多くあり、高い技術とオリジナリティーで活躍している。その規模は小さいが確かな技術が日本の繊維産業を側面から支えている点に焦点を当て、繊維学会会員をはじめとする多くの読者に紹介して、その存在と技術力の高さを紹介していきたいと、強い意欲を語って頂きました。

松尾先生の陣頭指揮の元、東京家政大学山崎昭雄先生、岐阜経済大平井東幸先生、岐阜女子大徳山孝子先生にも精力的に取材をしていただきながら、全国の企業や人を紹介して頂き、連載は3年間で30回を数えました。松尾先生から完全とは言えないものの一通り心当たりを紹介することができましたとのご判断を頂き、今回をもって連載「布を創る」を終了させていただきます。知られざる我が国の「布を創る」技術の高さを、読者諸兄に少しでも知っていただくことができましたなら幸いです。末筆ながら、取り上げさせていただいた各企業の関係各位に深謝申し上げます。